少年期におけるスポーツ観
勝利志向の形成過程の構造分析

山　本　清　洋

I　はじめに

池田等[1]は，スポーツの社会化に関する研究の動向と問題点をまとめる中で，スポーツの社会化に関する研究の範囲は，現在のスポーツ参与にいたる社会化過程を明らかにすることを目的とする研究がほとんどである，と述べている。周知のように，スポーツの社会化研究には，スポーツへの社会化とスポーツによる社会化の２領域があるといわれる。さて，最近のスポーツの普及，生活化は目をみはるものがあり，年代的には幼児から老人まで，更に健常者から非健常者に及んでいる。それだけに，現実的には多くの問題点が存在している。このような状況下で，スポーツへの社会化領域において，スポーツを生活化するメカニズムとその過程で生じる諸問題を明らかにすることは，理論，実践両面において大きな課題[2]となる。同時に，現実に実施されているスポーツの中で，どのようなスポーツ文化が形成され，それによって，いかなる人格が形成されているのかを，社会化過程を通して分析することも，大きな課題[3]となる。

昨年，組織化されたスポーツに参加する少年のスポーツ観に関する報告[4]をしたが，その中に多くの課題を残していた。

その一つが，スポーツ観が形成されるプロセスの特定化であった。具体的には，年令を視点において社会化過程のメカニズムを縦断的に追う作業[5]と各年代ごとのスポーツ社会における社会化過程のメカニズムの分析であった。

現在，スポーツの高度化路線にあるスポーツが，勝利至上主義であるとして，一般的に批判的にみられる傾向があるが，批判される点とそうでない点，あるいは批判の論理等については，感情的なレベルを越えて，スポーツによる社会化の視点から，分析がすすめられなければならない。

この点に関して，影山[6]は，勝利至上主義に立脚する高度化スポーツが，スポーツの大衆化に対して逆機能を持つと指摘し，更に近藤[7]は，勝利至上主義の概念をおさえた上で，影山と同様の報告をしている。一方，新堀[8]は，スポーツによる社会化の視点から，運用の方法によるものであるが，高度化スポーツは，人格形成上，順機能を持つと報告している。いわゆる，第二に残された課題は，勝利至上主義の構造を，科学的に把握することであった。

II　研究の目的と方法

一般的に批判されている勝利志向の構造が現実には，どのようなものであり，その規定要因はどのようなものであるのかを確定し，更に，勝利至上主義という用語の概念を，調査結果との関連において整理することに，本論の第一の目的をおく。更に，そのような勝利志向が形成されるメカニズムを確定することが，第二の目的である。

研究方法

スポーツ行動論[9]を理論的基盤として，調査の枠組を作製し，昭和55年10月～12月にかけて社会調査を実施した。調査の対象は，昭和55年度の岡山県中学校総体において上位16位以内の成績をあげた部活動に所属する中学校１年，２年の男女計237名である。

データー処理は，勝利志向と30の説明要因をクロスさせ，その関連度をクラマー係数によって算出し，x^2ー検定を行なった。

III　結果と考察

1　勝利志向の構造（表１）

質問紙では，理論的に考えられる５類型に勝利志向を分類したが，経験的レベルでは，表１に示すように強勝利志向が40.1％，中勝利志向が54.0％，弱勝利志向が5.9％となり，全体構造は，勝利志向の強い方からの３類型で構成されている。更に，この構造は，

強勝利志向と中勝利志向に分かれた二重構造である。表1a，bは，勝利志向を性と年令によって構造化したものである。性別では，男性が女性よりも勝利志向が強く，年令別では，勝利志向との間に有意な差はないが，13才と14,5才の2群では，14,5才群に勝利志向が強いという構造を持っている。更に地域的には，都市に勝利志向が強くなっている。

表1　勝利志向の構造

志向の型	全体 N	全体 %	a 性別 男性	a 性別 女性	b 年令（才） 13	b 年令（才） 14	b 年令（才） 15	c 地域 都市	c 地域 農村
			47.7	52.3	15.0	43.8	41.2	59.1	40.9
強勝利志向	95	40.1	51.6	48.4	9.8	44.6	45.6	72.6	27.4
中勝利志向	128	54.0	48.4	51.6	19.0	44.6	36.4	51.6	48.4
弱勝利志向	14	5.9	14.3	85.7	15.4	30.8	53.8	35.7	64.3

P＜0.05　　P＜0.01

3つの類型は上位から「スポーツは絶対勝たなければいけない」，「スポーツは勝った方がよい」，「スポーツは勝っても負けてもよい」の内容とそれぞれ対応している。

2　勝利志向を規定する要因

表2は，勝利志向を規定する要因群をクロスした関連表である。以下，各要因群ごとに勝利志向の3類型との関連を考察し，勝利志向の全体像をみてみる。

(1)　社会的要因群

社会的要因は，プレイヤーがゲームや練習で他者と相互作用を行なう過程や，ゲームや練習を媒介として他者と相互作用を行なう過程で生じる要因，あるいは，技術や主体の能力を基準として形成される階層的要因，及び直接的にはスポーツを媒介としないで，他者と相互作用を行なう際に生じる要因の三群に分けて考えられる。

①　関連の弱い要因

外的要因のうち，「年令」，「遊び仲間を持っているかどうか」，あるいは「友人がスポーツが好きかどうか」に関する要因は，勝利志向の強さとの間に，統計的に有意な差はみられない。又，内的要因では，「スポーツの種目」，「チーム内での役割（係）」，「練習やゲームでの意志決定への参加」，「指導者の指導方法」，「プレイヤーと家族のスポーツ話題の量」などの要因は，勝利志向の強さとの間に，統計的に有意な差はみられない。

②　勝利志向と関連の強い要因

(イ)　地域的要因（表1－c）

強勝利志向は，都市で72.6％，中勝利志向は，51.6％を示し，農村の場合，それぞれ27.4％，48.4％を示している。いわゆる勝利志向の強さは，地域的特性と関連が強く，都市程，勝利志向が強くなっている。（P＜0.01，$\sqrt{Cr}$ = 0.238）

(ロ)　性（表1－a）

強勝利志向では，女性よりも男性が多く，中勝利志では，逆に女性が男性よりも多い。特に，この傾向は，弱勝利志向の場合著しく，男性14.3％に対し，女性85.7％となっている。

いわゆる，勝利志向は男性に強く，女性の場合，やや弱いと言える。（P＜0.05，$\sqrt{Cr}$ = 0.170）

(ハ)　チーム内の社会的地位（表3）

表3にみるように，チーム内の社会的地位と勝利志向との間には，強い関連がみられる。具体的には，補欠でない者よりも補欠の方が，補欠よりは選手の方が，それよりは中心選手の方が，勝利志向が強くなっており，いわゆる，チーム内の社会的階層が高い程，勝利志向は強くなる傾向がある。（P＜0.01，$\sqrt{Cr}$ = 0.189）

(ニ)　所属チームの社会的地位（表4）

強勝利志向のうち63.8％は，最も強いチームに所属し，中勝利志向の場合は，38.8％である。又，勝利志向が弱くなるにつれて，2番目に強いチームに所属する割合及び3番目に強いチームに所属する割合は，増えている。勝利志向は，所属するチームの競技力（社会的地位）が高い程，強くなることがわかる。（P＜0.01，$\sqrt{Cr}$ = 0.247）

(ホ)　技術階層（表5）

それぞれの所属しているチームで占る個人の技術の

地位と勝利志向の強さとの関連をみるものである。強勝利志向では，「とてもうまい方である」，「うまい方である」と答えた者は18.9％となり，中勝利志向では，10.9％，弱勝利志向は0％となり，勝利志向が強い程，上位の技術階層にいることがわかる。一方，技術が「ふつう」以下にある者の割合は，勝利志向が弱まるにつれて殖えている。

いわゆる，所属しているチームの中で，技術階層が上位にある程，勝利志向が強くなることがわかる。（$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.187$）

(ヘ) 家族のサンクション（表6）

強勝利志向で，「必ず応援にくる」，「時々，応援にくる」と答える割合は，49.0％，中勝利志向では，36.0％である。又，弱勝利志向は，0％である。勝利志向が，強くなるにつれて，試合に対する家族のプラスのサンクションは，直接に応援するという形で表れ，そのことが勝利志向を強めているとみてよい。（$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.223$）

(2) 主体的要因

主体的要因は，個人のパーソナリティ体系に所属する要因から構成されるが，具体的には，欲求，動機，態度，意識，経験などを表わしている。

① 勝利志向と関連の弱い要因

「スポーツを行なう楽しみ」，「スポーツ大会への達成欲求」，「職業への達成欲求」の3要因と勝利志向との間には，統計的に有意な関連は，みられなかった。しかし，「スポーツを行なう楽しみ」は，クラマーの関連度係数が0.180で，かつ$P < 0.053$であることを考慮すれば，表7にみるように，勝利志向が強い程，「スポーツを行う楽しみ」を多く感じているとみてよい。

次に，「職業への達成欲求」も，勝利志向との間に，統計的な有意な関連は認められないが，今日の少年の特性を知る上で重要と思われるので，記述をすすめる。

まず，強勝利志向及び中勝利志向は，同様な傾向を持っている。両志向型を平均すると職業への達成欲求は，「小学校の先生」19.2％，「ふつうの会社員」38.1％，「プロ・スポーツのスター」17.7％の3職業で全体の75％を占めており，ある程度の努力をして安定した職業を希望する型と，スポーツ職業への強い達成欲求を持つ型に分類できる。

弱勝利志向の場合は，前述の2志向型と異なり，「プロ・スポーツのスター」への達成欲求が0％となり，代りに芸術家，小説家への志向が台頭してくる。

「プロ・スポーツのスター」への達成欲求は，強勝利志向で21.6％，中勝利志向で13.8％となっており，勝利志向の強い者程，スポーツ職業への達成欲求も高くなっている。更に，スポーツ職業は，全体の11.8％を占め，第三位に希望される職業でもある。

大会への達成欲求は，傾向としては，勝利志向が強い程，レベルの高い大会への志向がみえてはいるが，例えば，オリンピック大会への志向は，弱勝利志向が最も高いというように，自己の能力と達成欲求に一貫した合理性がないのも一つの特徴である。

② 勝利志向と関連の強い要因

(イ) スポーツの経験年数（表9）

小学校の3年生から6年間継続している者は強勝利志向で22.9％，中勝利志向で14.9％，弱勝利志向では0％となり，勝利志向が弱まるにつれて，減少している。

次に，小学校6年から継続している者は，逆の傾向をみせ，勝利志向が弱まるにつれて増加している。これらの結果は，スポーツの経験年数が長い程，勝利志向が強まることを表わしている。（$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.239$）

(ロ) 練習態度（表10）

達成欲求に現われた具体的な目標を獲得するためには，練習場面での意欲が具体化することが大切である。この項目は，そのような練習態度が，勝利志向の強弱と，どのような関連があるかをみるものである。

「普通よりも，もっと練習している」者は強勝利志向で70.2％，中勝利志向で54.3％，弱勝利志向で28.6％を占めており，勝利志向が強い程，練習が熱心であるとみてよい。「普通以下に，練習する」者は，勝利志向が弱まるにつれて増加している。

達成欲求を充足するべく，練習する態度は勝利志向が高い程，熱心であるとみられる。（$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.239$）

(ハ) 達成欲求（チーム内での社会的地位　表11）

社会的要因の項で，チーム内での地位が高い程，勝利志向が強いことをみたが，この達成欲求は，上記の特性を持つチーム内社会的地位への志向を表わすものである。

「チームの中心選手以上になりたいという達成欲求」は，強勝利志向で54.8％，中勝利志向で35.4％，弱勝利志向で7.1％である。又，「選手になりたくないという弱い達成欲求」は，強勝利志向から弱勝利志向になるにつれて，増加している。この結果は，勝利志向が強い程，高い達成欲求を持っていることをしめす（$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.221$）。

(3) 文化的要因群

文化的要因を，スポーツ行動を規制している要因ないし，スポーツを離れた生活場面を統制する規範に分化し，前者を内的要因，後者を外的要因とした。

① 勝利志向と関連の弱い要因

生活信条及びスポーツ行動の構成要素であるルール観，マナー観と勝利志向の間には，統計的な有意の差は認められなかった。しかし，関連は認められなくとも，各要因の特性は，勝利志向の全体像を考察する上で，重要であるので，簡単に特性に触れてみる。

(イ) 生活信条

6つの生活信条のうち，「自分の好みに合った暮しをする」という「マイホーム志向型」が圧倒的に高く，3勝利志向型の平均で全体の70％近くを占めているのは，今日の少年達の一特性を示している。更に，弱勝利志向で，「マイホーム志向型」の他，「一生けんめいに働き金持ちになる」ことと「自分自身のことを考えず，社会のために尽す」という生活信条が，他の2つの勝利志向に比較して高いのは，注目してよい。

尚，マナー，ルール観は後述する。

② 勝利志向と関連の強い要因

(イ) スポーツ信条（表12）

スポーツ信条という用語は，正確には吟味していないが，一つは，社会化過程での自己表現，二つには，個人主義的な考え方がスポーツ場面でどのように現われるか，ということを含ませている。具体的には，社会化の方法が，大人側からの一方的な社会化なのか，あるいは，大人と子供によるダイアディックな社会化であるのかを，子供の態度を媒介にして知ろうとするものである。

表12から明らかなように，勝利志向が強い程，監督（大人）中心の社会化を支持している。逆に，「自分が最もよいように，自分達で一人一人のフォームはつくってよい」とする個人主義的考えの強い態度は，勝利志向が強い程，少なくなる。

結論的には，勝利志向が強い程，一方的な大人側からの社会化を支持する側向が強いといえる。

(ロ) 役割観（表13）

三志向型とも，スポーツ行動での役割を遵守する態度を強く持っており，「役割は，適当に果せばよい」と考える態度は，平均して0.5％にすぎない。只し，三志向型間には，明らかに違いがみられ，勝利志向が強まるにつれて，役割遵守の態度は強くなっている（$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.173$）。

(ハ) スポーツ技術観（表14）

スポーツが競争という社会的行為である限り勝利が目標として位置づけられ，その目標達成の手段である技術の高度化は，一つの理論的帰結でもある。

表14をみると，「絶対にうまくないといけない」とする層は，全体の3.1％であるが，次の層である「うまい方がよい」は，63.9％にも及ぶ。

志向型別にみると，明らかに違いがみられる。強勝利志向と中勝利志向では，「うまい方がよい」とする層以上が，それぞれ84.0％，81.3％となり同様の傾向を示すが，その内で「絶対うまくないといけない」とする層は，強勝利志向が8.5％を示し，中勝利志向の0.8％を大きく上回る。

一方，弱勝利志向は，「絶対うまくないといけない」層と「うまい方がよい」層を合わせて35.7％であるのに対し，「どちらでもよい」層は57.1％を示している。以上のことから勝利志向が強い程，技術を高度化する態度が強いとみてよい（$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.280$）。

(ニ) ルール観，マナー観

ルールやマナーを遵守する意識は，三志向型の平均で98％をこえており，「守らなくてもよい」という非遵守的態度は，ルールで1.2％，マナーで0.3％にすぎない。いわゆる，勝利志向の強さにかかわらず，全体的に，規範を遵守する意識は強いといえる。しかし，規範を遵守する意識と勝利志向間には，統計的に有意な差はみられないが，「規範は絶対に守る必要がある」という意識は，強勝利志向型が72.6％，中勝利志向が69.5％，弱勝利志向が57.1％という結果から，勝利志向が強い程，規範遵守の態度も強くなるとみてよい。（ルール観，マナー観と勝利志向間には，統計的な有意差はみられない）。

(ホ) スポーツ知識の認知度（表15）

日常，マスメディアを媒介として報道される割合の高い野球，バレーボール，サッカー，オリンピックに関する知識やスポーツのルールに関して6つの質問をし，6点満点で認知の度合を調べた。

5点以上の得点率が，強，中勝利志向では約95％であるのに対し，弱勝利志向は，約80％となり，かなり減少している。いわゆる，勝利志向が強い程，スポーツ知識の認知度も高いとみてよい（$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.201$）。

(ヘ) スポーツ役割（職業）の認知（表16）

スポーツ職業は，職業の視点からみれば，社会の構成要素として期待されている役割である。この質問は，スポーツ職業と選手（役割獲得者）の組合せを10点満

点として，認知度を調査し，勝利志向との関連をみたものである。

強勝利志向と中勝利志向では，10点満点が90％をともに越えており，大体同傾向にある。一方，弱勝利志向の10点満点は，71.4％と低くなっている。逆に8点以下は，強・中勝利志向がそれぞれ3.3％，1.5％であるのに対し，弱勝利志向は28.6％を示している。以上の結果は，勝利志向が強い程，スポーツの認知度も高いことを表わしている（$P<0.05$，$\sqrt{Cr}=0.201$）。

3　調査結果から得られる仮説

以上，少年スポーツの勝利志向の構造及び勝利志向を規定する要因群の分析をすすめてきた。それらの中で，特に強勝利志向，中勝利志向，弱勝利志向の志向類型に強く関連する要因（$P<0.05$，$\sqrt{Cr}\geqq 0.100$）を，個別的に抽出して仮説化すれば，次のようになる。

(1)　地域的には，農村部よりも都市部に勝利志向は強くみられる。

(2)　性別では，男性が女性よりも勝利志向の傾向が強い。

(3)　勝利志向は，チームの課題遂行を基準として形成される社会的地位が高くなるにつれて，強くなる。

(4)　所属しているチームの競技力が高くなるにつれて，勝利志向が強くなる。

(5)　スポーツの技術階層が上位になるにつれて，勝利志向が強くなる。

(6)　家族のプラスのサンクションが，応援などの形で，直接的かつ具体的になるにつれて，勝利志向が強まる。

(7)　組織化されたスポーツでの社会化過程の年数が長くなるにつれて，勝利志向は強まる。

(8)　勝利志向が強い層ほど，達成欲求を裏づける練習態度が強化される。

(9)　勝利志向の強い層ほど，チーム内での社会的地位獲得への欲求が高い。

(10)　指導者側からの一方的社会化は，勝利志向が強いほど，受け入れ易い。

(11)　勝利志向が強いほど，役割，規範を遵守する態度が強い。

(12)　勝利志向と技術の高度化は，強い正の相関がある。

(13)　勝利志向が強い程，スポーツに関する知識が正確になる。

以上の結果をもとに，勝利志向の形成過程を，先行研究と関連させて，仮説化してみる。

表2　勝利志向と各要因との関連図

		項目		P	√Cr	順位
社会的要因	外的要因	地域（都市・農村）	0.0012	※※※	0.238	5
		年令	0.274		0.106	
		性	0.032	※※	0.170	12
		遊び仲間	0.482		0.078	
		スポーツの好・嫌（友）	0.229		0.133	
	内的要因	スポーツ種目	0.097		0.129	
		チーム内の役割（選手）	0.002	※※※	0.189	9
		チーム内の役割（係）	0.092		0.158	
		所属チームの地位	0.0001	※※※	0.247	2
		技術階層	0.037	※※	0.186	10
		意志決定への参加(練習)	0.140		0.122	
		意志決定への参加(ゲーム)	0.206		0.115	
		コーチの態度	0.462		0.111	
		家族とのコミュニケーション	0.148		0.159	
		家族の支持	0.002	※※※	0.223	6

		項目		P	√Cr	順位
主体的要因	外	スポーツの経験年数	0.028	※※	0.239	3
	内的要因	楽しみ観	0.053		0.180	
		達成欲求（大会）	0.293		0.159	
		達成欲求（地位）	0.003	※※※	0.220	7
		練習態度	0.000	※※※	0.239	3
		職業への達成欲求	0.202		0.223	
文化的要因	外・要	生活信条	0.280		0.160	
		スポーツ信条	0.039		0.169	13
	内的要因	勝敗観				
		役割観	0.006	※※※	0.173	11
		ルール観	0856		0.074	
		マナー観	0.326		0.098	
		スポーツ技術観	0.000	※※※	0.280	1
		スポーツ情報	0.064		0.176	
		スポーツ知識の認知	0.013	※※	0.201	8

（注　※※　5％水準の危険率で有意差有，※※※　1％水準の危険率で有意差有）

表3　チーム内の社会的地位

チーム内の役割 ＼ 志向の型	選手	補欠	その他
強勝利志向	61.3	26.9	11.8
中勝利志向	46.0	37.9	16.1
弱勝利志向	7.1	57.2	35.7

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.189$

表4　所属チームの社会的地位

所属チームの地位 ＼ 志向の型	チームも強い	強いチーム二番目に	強いチーム三番目に	その他
強勝利志向	63.8	14.9	6.4	14.9
中勝利志向	38.8	19.0	15.7	26.5
弱勝利志向	0.	28.6	21.4	50.0

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.247$

表5　技術階層

技術階層 ＼ 志向の型	とてもうまい方である	うまい方である	ふつう	どちらかと言えば下手な方である	へたな方である
強勝利志向	2.1	16.8	52.6	14.7	13.8
中勝利志向	2.3	8.6	44.5	25.8	18.8
弱勝利志向	0.	0.	50.0	7.1	42.9

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.187$

表6　家族のサンクション

家族の支持 ＼ 志向の型	必ずんにくる応える	時々んにくる応える	応えなこをげでまんいるすにが時は家は	応えるんったことにはなくめない	その他
強勝利志向	16.0	33.0	39.4	6.4	5.2
中勝利志向	9.4	26.6	35.2	21.1	7.7
弱勝利志向	0.	0.	64.3	14.3	21.4

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.223$

表7　スポーツの楽しみ

楽しみ観 ＼ 志向の型	楽しいものすごく	楽しい	普通	楽しくない	全く楽しくない
強勝利志向	35.8	55.8	8.4	0.	0.
中勝利志向	24.2	50.8	22.7	1.6	0.7
弱勝利志向	7.2	71.4	21.4	0.	0.

$P < 0.053$，$\sqrt{Cr} = 0.180$

表8　達成欲求（職業）

希望する職業 ＼ 志向の型	芸能スター	小学校の先生	政治家	芸術家小説家	大工さんやすしやさん	大学の先生	大きな会社の重役	大規模なのお百姓さんき	プロスポーツのスター	ふつうの会社員
強勝利志向	4.5	15.9	1.2	4.5	3.4	0.	6.8	1.2	21.6	40.9
中勝利志向	2.6	22.4	0.9	6.9	4.3	1.7	9.5	2.6	13.8	35.3
弱勝利志向	7.1	28.6	7.1	21.5	0.	0.	7.1	7.1	0.	21.5

$M = 218$　$\sqrt{Cr} = 0.223$

表9　スポーツの経験年数

経験年数 ＼ 志向の型	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年
強勝利志向	3.3	19.6	16.3	13.0	25.0	20.7	2.2	0.
中勝利志向	0.	25.8	14.2	12.5	32.5	13.3	0.8	0.8
弱勝利志向	0.	23.0	38.5	38.5	0.	0.	0.	0.

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.239$

表10　練習態度

達成欲求の現状 ＼ 志向の型	うよれしまうつてくにになるも練る習	うよしてまくいにな練る習	ふつう	あまにい練ないしてり熱心	練習はふまじめである
強勝利志向	11.7	58.5	23.4	4.3	2.1
中勝利志向	5.5	48.8	36.2	6.3	3.2
弱勝利志向	0.	28.6	35.7	35.7	0.

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.239$

表11　達成欲求（チーム内での社会的地位）

チーム内役割への達成欲求 ＼ 志向の型	キャプテン	チーム中心選手の	できれば選手	選れもよくなれて手	選手になりたくない
強勝利志向	3.2	51.6	40.0	5.2	0.
中勝利志向	0.8	34.6	57.5	4.7	2.4
弱勝利志向	0.	7.2	71.4	21.4	0.

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.221$

表12　スポーツの信条

スポーツの信条 ＼ 志向の型	中心でよいかんとく	一人特徴がるーチ一人ようとに相談だのせコ	自分でつくればよい	わからない
強勝利志向	12.0	68.4	16.3	3.3
中勝利志向	8.8	58.4	27.2	5.6
弱勝利志向	0.	64.3	14.3	21.4

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.169$

表13　役　割　観

役割観 ＼ 志向の型	一にき生果だけたんす命べ	果べたきすだ	適当に果せばよい
強勝利志向	93.7	6.3	0.
中勝利志向	75.8	22.7	1.5
弱勝利志向	71.4	28.6	0.

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.173$

表14　スポーツ技術観

技術観 ＼ 志向の型	絶対なないうとまいくけ	うまいい方がよい	どちらでもよい	下手でもよい	絶対なくもようくまて
強勝利志向	8.5	75.5	10.6	1.1	4.3
中勝利志向	0.8	80.5	15.6	3.1	0.
弱勝利志向	0.	35.7	57.1	7.2	0.

$P < 0.01$，$\sqrt{Cr} = 0.280$

表15　スポーツ知識の認知度（6点満点）

スポーツ知識の認識度 ＼ 志向の型	3点 50	4点 67	5点 83	6点 100
強勝利志向	2.1	2.1	13.9	81.9
中勝利志向	1.6	3.1	14.8	80.5
弱勝利志向	0.	21.4	7.1	71.5

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.167$

表16　スポーツ役割（職業）の認知度

スポーツ役割の認識度 ＼ 志向の型	6点	7点	8点	9点	10点
強勝利志向	2.1	1.1	1.1	0.	95.7
中勝利志向	0.	0.8	7.0	0.8	91.4
弱勝利志向	0.	7.2	21.4	0.	71.4

$P < 0.05$，$\sqrt{Cr} = 0.201$

Ⅳ　結　　論－勝利志向の形成過程－

1　勝利志向の検討

Ⅲ章でみたように，本調査の対象である少年達の勝利志向の構造は，「試合は，絶対勝たなければいけない」とする強勝利志向と「試合は勝った方がよい」とする中勝利志向がそれぞれ40.1％，54.0％を占める二重構造を形づくっている。

まず，二つの志向型を，先行研究を参考にして，概念的に整理をしてみる。

J.G. Albinson は，Rrofessional orientation of the amature hockey coach の中で，Professional orientation を「スポーツにおいて，スキルを伸ばし，かつ，勝利をめざすことを最大の価値とする志向[10]」と定義し，更に「スポーツでは，達成価値というものは，正当なものとして評価されるけれども，Webb が言うように，技術を高めることに熱中しすぎたり，勝つことに過度に走ることは，プレイの価値や良きスポーツマンシップとしばしば対立することになる[11]」と，その特性に言及している。

近藤は，Chanpionship sport の用語について，「スポーツにおける業績主義的な社会規範と選手制度の体系[12]」と定義し，更に，「チャンピオンスポーツの絶対神は，競技に勝つことを価値基準としてすべてに優先させる，いわゆる勝利至上主義であり[13]」，「スポーツの実践において，内容や方法など一切の過程的価値を捨象し，ひたすら結果としての勝利のみを追求する[14]」と，その特性を述べている。

この他，影山は，アスレティシズムを「運動部活動における勝利至上主義的傾向やそれを助長するような社会全体の風潮[15]」と定義し，アスレティシズムを支える価値志向として勝利至上主義を位置づけている。

以上みてきたように，Professional orientation と Chanpionship sport 及びアスレティシズムは，近藤の勝利至上主義を基盤とする勝利志向を，内包としていることがわかる。

さて，調査結果のうち40.1％を占める「試合は，絶対勝たなければいけない」とする強勝利志向は，Albinson，近藤，影山等の勝利至上主義と同値であるのだろうか。

勝利が絶対的な価値になることから，勝利獲得の直接的手段としての技術の高度化を重視し，直接的関連の薄い規範や役割を遵守することの価値が弱まる，というのが三者に共通する仮説である。

村上泰亮は，行動の類型化の基準に価値を採用しているが，その中で手段的合理主義を「一定の目的のために，最善の結果を生むような手段を選ぶことをさす。……。手段的合理主義の純粋形では，手段の価値は目的の達成のみによって決り，手段それ自体には，何の直接的価値もない。したがって，極端に言えば，目的のためには手段を選ばないという行動が生まれる[16]」と定義している。この村上の手段的合理主義は，三者の勝利至上主義の定義と同値であるとみてよい。

一方，調査に表われた強勝利志向は，「ルール」については，98.7 %の者が，守る必要があると答え，マナーに至っては，99.6 %が守る必要がある，と答えている。更に，「役割」についても，98.2 %が，与えられた役割は一生けん命に果たすべきだ，と答えている。この結果からみれば，強勝利志向は，勝利至上主義の価値志向とは，大きな違いがあることがわかる。もちろん，村上は「一般的には，人々がある行動をとる時，目的達成の手段としての派生的価値と行動それ自体の価値との二つが考慮されるのがふつうである[17]」と述べ，上述の定義を，理念型として位置づけている。それにしても，例えば，Albinson，Webb 等が，勝利志向が高くなるにつれて，規範，役割の遵守が弱くなる，という仮説とは大きな違いがあり，本調査での，「試合は，絶対勝つべきだ」とする価値志向に，勝利至上主義の概念を適応することは，適当ではない。そこで，本調の強勝利志向を，勝利に第一義の価値をおきつつも，目的達成の手段としての技術に対する派生的価値及び期範，役割にも価値をおいた志向，と定義づける。

只，本調査の規範と役割に関する質問は，上位概念的なものであり，下位概念に関する質問では構成されていない，下位概念で構成された調査結果では，異る報告もあるので概念の検討は，更に精密化する必要がある。

次に，「試合は勝った方がよい」という価値志向は，どのように概念化できるのだろうか。Albinson は，プレイが組織化されて，ゲーム，スポーツとなることで，Professional orientation が強くなり，Means-oriented system（手段にも価値を置く，いわゆる行動自体に価値を置くスポーツ志向体系）から，End-oriented system（結果のみに価値を置くスポーツ志向体系）へと価値志向がかわる[18]と，述べている。このAlbinson の説と「チャンピオン・スポーツの絶対神は，競技に勝つことを価値基準とする」という勝利至上主義を考え併せれば，「試合は，勝った方がよい」という価値志向は，Means－oriented system に近い概念となり，経験的レベルでの手段的合理主義の行動にも似ている。只，本調査結果では，Ⅲ章でみたように，この価値志向は，強勝利志向に比較して，規範，役割を遵守する態度が，わずかながら劣っている。従って，概念自体の検討は，更に調査を重ねた上で，特定化しなければならないが，ここでは，中勝利志向を，勝利とともに手段としての技術及び規範，役割にも同等の価値をおいた志向，と定義しておく。

2　社会化過程の全体像

図1は，強勝利志向と中勝利志向が形成される社会化過程を，スポーツ行動の下位体系である社会，文化，主体の各体系に基づいた30の諸要因から，勝利志向との関連が，5％水準の有意差がみられ，かつクラマーの関連度係数が0.100以上の要因を抽出して構成した「勝利志向の形成過程」の全体像である。図中のA領域［　　］の関連図は，スポーツ行動の構造を表わしている。

本調査の対象は，昭和55年度の岡山県下の競技会で上位16位以内にある中学校の部活動から抽出しているので，Webb 等が，フェア・プレイを欠いていると指摘する組織化されたスポーツに参加している人々ということになる。Webb 等は，組織化されたグループを，勝利至上主義に近い形で特定化しているが，前項でみたように，本調査の対象である組織化されたグループの勝利志向は，これまでに批判されている勝利至上主義とは異る構造を持っていた。そこで強勝利志向と中勝利志向に2分化した構造の価直志向が形成される過程に的を絞って考察をする。

職業等への達成欲求（表8，表11）や，日常生活を大枠として統制する生活信条の中に，エリート志向とマイホーム志向という2つの価値志向へ分化する兆候がみられる。

このような価値志向を内面化している少年のスポーツ社会での信条はどのように形成されるのであろうか。調査結果では，強勝利志向が中勝利志向よりも，大人側からの Onesided　な社会化を受けいれやすい傾向を持っていることがわかる。職業への達成欲求や生活信条ほどではないが，しかしそれらを反映した形で2分化への兆候が潜在化しているとみてよい。この2分化価値志向の兆候を潜在した形で，現実のスポーツ社会化が展開してゆく（図1．1→2→3）．

スポーツ達成欲求（表11，表14）は，2勝利志向ともに，現代スポーツの風潮を反映して，技術を高めたり競技レベルの高い大会へ参加したり，チーム内での社会的地位を高めたりする達成欲求は強いものがあるが，しかし，両志向型の間では，わずかに，強勝利志向が，いずれの達成欲求においても高くなっており，ここでも志向分化の兆候が現われている。

このような達成欲求は，現実には欲求を充足するための手段となる練習態度によって裏付けられる必要がある。練習態度を問われて，練習が熱心であるとする

者は，強勝利志向が強く中勝利志向とは大きな違いがみられる。いわゆる，練習態度の型は，①達成欲求を充たすために努力する型と，②達成欲求は持っているが，それを充たすための努力は，普通以下にしか努力しない型に分化している。（図1．7→8）

以上，2分化した少年の意識構造は，高度化志向という技術観との組み合せによって，更に，明確な形をつくりあげてゆく。

すなわち，次の2通りの組み合わせである。

(1)　「高度化志向という技術観」と①達成欲求を充たすために努力する型との組み合せ。〔達成欲求充足型〕

(2)　「高度化志向という技術観」と②達成欲求は持っているが，それをみたすための努力は普通以下にしかしない型との組み合わせ。〔達成欲求未充足型〕

∘技術の外在化，内在化現象の出現

技術は，勝利を得るための手段であるが，勝利を得るためには，技術の高度化は限りなく高くても許される。それ故に，技術の高度化の目標は，限りなく遠のいてゆき，代りに技術を修得する練習それ自体に価値を置くという手段的能動主義の価値[19]が生じてくる。

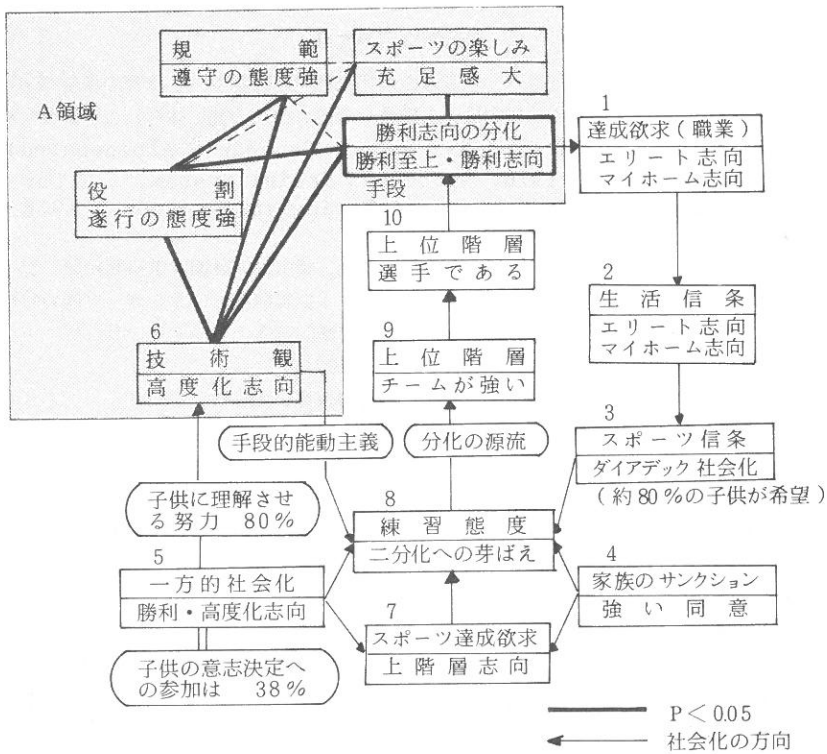
現実には，技術を修得する子供の能力によって，この手段的能動主義に立脚する練習にコミットする層と，コミットしない層が当然生じてくる。すなわち，技術の内在化現象と外在化現象が生じるのである。更に，この現象は，練習場面での，大人側からの一方的な社会化という現実によって，更に強化されてゆく。

技術の外在化現象は，(2)の組み合せの場合生じ，内在化現象は，(1)の組み合わせの場合に生じてくる。

(1)の「技術の高度化」×「達成欲求充足型」を，「技術の内在化型」と呼べば，(2)の「技術の高度化」×「達成欲求未充足型」は「技術の外在化型」と呼べる（図1．5→6→8）

「技術の内在化型」は，技術を基盤としたチーム内での社会的地位が上昇し，更に，チームの社会的地位が上昇することで，高度化価値を内面化し，強勝利志向へと構造化されてゆく。役割・規範の強い遵守態度の形成については，指導者の意識構造の把握が必要であるが今回は，その点を捨象しているので，十分なる分析はできない。

図1　勝利志向の形成過程



只，役割・規範の遵守が，勝利志向と結びつけられた形で，指導者側からの社会化過程を経て内面化されたことが推察できる。というのは，勝利志向が強い程，大人側の考えを受け入れ易い体質のあることを，先にみたからである。（図1. 8→9→10）

「技術の外在化型」は，チーム内での限られた社会的地位を獲得できない場合に，更に，生活信条でのマイホーム志向意識が作用して中勝利志向へと構造化してゆくと考えられる。規範，役割遵守が，強勝利志向に比べて弱いのは，マイホーム志向型の精神及び，勝利志向の弱いものは，大人側からの一方的な社会化よりも，Dyadic な社会化を望むという体質に起因していると考えられる。（図1. 8→9→10）

以上の社会化過程を経た「強勝利志向」ないし「中勝利志向」ともに，勝利への志向の強さは，社会化の期間が長くなれば，強化されるという特性をもっている。

残された課題

以上，勝利志向の構造，勝利志向と各要因の関連分析を行ない，更に勝利志向の形成過程について一つの仮説を提示したが，今後社会化過程の視点から，勝利志向の形成過程を理論化するためには，2，3の課題が残されている。

具体的には，

(1) 勝利志向の概念を定式化するために，勝利志向，規範，役割に関して，下位概念レベルに対応した調査を行なうこと。

(2) 社会化過程の重要なる他者である，指導者，家族のスポーツ行動の要因に関する調査結果を，今回の形成過程の中に位置づけること。

(3) データー処理の課題として，勝利志向と説明変数の関連を，相関及び検定のレベルから，重回帰分析による説明変数の強さを出して，更にその結果から，パスダイアグラムを設定し，変数間の因果規定力を説明するレベルに高めること。

(4) 最後に，年令を視点にした縦断的な勝利志向の形成過程までに構造化すること……等が，作業として残される。

尚，本研究は，昭和55年度の文部省科学助成金の補助を受けて研究している「少年期におけるスポーツ観の形成過程の分析」の第二報である。最後に本調査研究を実施するにあたり，ご協力いただいた調査対象校，ならびにスポーツ少年団の指導者，団員，ご父兄の方々，各教育委員会の方々にお礼を申し述べます。

脚注及び引用文献

1) 池田勝，山口泰雄，スポーツの社会化　ー最近の研究の動向と問題点ー，体育の科学 Vol•29，1979

2)，3) スポーツへの社会化に関する諸研究は，上揚書，池田，山口の他，体育社会学研究会編　スポーツ参与の社会学，道和書院　1977. Canadian Sport, Grunedu & Albinson(ed). Part six Sport and Moral Order, 1976. Sport and Social System, J.W.Loy & G.S. Kenyon(ed) Chapter 6 Sport and Socializing Institutions, 1978. にみることができる。

4) 拙著，少年期におけるスポーツ観ー勝利志向の構造分析，岡山県立短期大学研究紀要　25号，1981

5) この点に関しては，昭和56年度日本体育学会において，「少年期におけるスポーツ観の分析ー勝利志向の要因分析ー」と題して，小学・中学の比較を行ない，縦断的研究の糸口を見い出した。

6) 影山健，運動部活動見直し論　体育科教育，8月号，1979

7) 近藤義忠，教育の中のチャンピオン・スポーツ，体育科教育，8月号，1979

8) 新堀通也，教育としての部活動，競技会体育科教育，8月号，1979

9) この点に関しては，拙著，スポーツ行動モデル構築の方向と手順，岡山県立短期大学研究紀要　22号，1978 を参照のこと。

10) J.G.Albinson. Canadian Sport, The Professional Orientation of the Amature Hockey Coarch, p378, 1976.

12)，13)，14) 近藤義忠，上掲書

15) 影山健，上掲書

16)，17) 村上泰亮　産業社会の病理，P 85，中公叢書，1975

18) J.G.Albinson　上掲書，PP 388－391

19) 手段としての活動それ自体に価値を見い出すということであり，具体的な目標は常に遠のいてゆく。村上は，前掲書で，手段的能動主義は，能動主義と手段的合理主義の合成である，と述べる。

昭和57年 3月24日受理